

令和4年度 厚生労働行政推進調査事業費補助金（慢性の痛み政策研究事業）
分担研究報告書

痛みセンターを中心とした慢性疼痛診療システムの均てん化と
診療データベースの活用による医療向上を目指す研究

研究分担者 松香 芳三 徳島大学大学院医歯薬学研究部 教授

研究要旨

慢性口腔顔面痛に関する教育は十分に実施されておらず、疼痛治療を専門としていない一般の医師・歯科医師は、慢性口腔顔面痛治療を訴える患者の診察で困窮している。日本口腔顔面痛学会は一般の医師、歯科医師、医療従事者を対象として、口腔顔面痛の指導や学習法を支援し、質の高い教育の普及を目的に e-learning による教育システムの構築を進めている。口腔顔面痛に関する e-learning 教育システムにおける「学習部門」は日本口腔顔面痛学会で作成したガイドブックのオンライン化と、学習目標に沿った小テストを設定した。「仮想患者部門」では、動画で配信される患者の主訴や現病歴に対して鑑別疾患を挙げ、適切な診査や検査を選択し、その結果から診断・治療を行っていくという臨床プロセスを再現した。また、随時受講可能な実力テストを設け、結果はレーダーチャートで表示し、自身の学習推移や必要学習領域を把握できるようにした。

徳島大学病院においては、疼痛治療を専門としていない一般の医師、歯科医師が治療に難渋している痛みを訴える患者を受け入れるため、医科・歯科の痛みセンターを発足した。徳島大学病院痛みセンター設立後、スムーズな患者紹介が観察されるとともに、痛みのために困窮している患者を救済することができている。また、徳島大学病院の歯科専門の痛みセンターは、四国地区で唯一であり、四国全県から多数の患者紹介が見られている。

A. 研究目的

慢性口腔顔面痛に関する教育は、これまで十分に実施されて来なかったこともあり、多くの医療関係者がよく理解しているとは言えない状況である。疼痛治療を専門としていない一般の医師・歯科医師において、慢性口腔顔面痛治療を訴える患者の診察では困窮することが多い状況である。そのため、日本口腔顔面痛学会では疼痛治療を専門としていない一般の医師、歯科医師、医療従事者を対象として、口腔顔面痛の指導や学習法を支援し、質の高い教育の普及を目的に e-learning による教育システムの構築を進めている。また、徳島大学病院においては、疼痛治療を専門としていない一般の医師、歯科医師が治療に難渋している痛みを訴える患者を受け入れるため、医科・歯科の痛みセンターを発足した。

B. 研究方法

教育システムの構築に関しては、国際疼痛学会 (IASP) と日本疼痛学会 (JASP) が募集した大規模プロジェクトである「慢性口腔顔面痛の生涯教育プログラムに資する Evidence based 学習管理システムの開発」に日本口腔

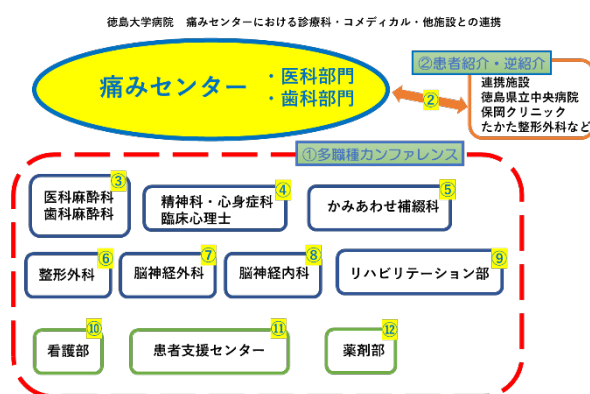
顔面痛学会が申請し、採択されることにより、実現した。実施環境と機会を自由に設定できるようにスマートフォンの活用を想定し、機種制限のないウェブアプリケーションを採用した。コンテンツは知識を身につける「学習部門」、知識を実践で用いる「仮想患者部門」、最新の専門情報を配信する「オンラインセミナー」の3つを軸とした。これらは全国12施設の口腔顔面痛専門医と疼痛研究者のチームで作成した。

E-learning contents based on the textbook



徳島大学病院痛みセンターは、種々の痛みに対して医科・歯科の複数の科、多職種からアプローチを実施し、患者にとって最適とな

る目標を設定し、治療方法を多角的に検討・実践するために設立された。治療方法、治療方針の決定については、関係する各科で連携を図り、定期的なカンファレンスを実施している。痛みセンターは、医科ペインクリニック外来と歯科ペインクリニック外来から設立されており、麻酔科、精神神経科、脳神経内科、脳神経外科、整形外科、リハビリテーション部、歯科麻酔科、かみあわせ補綴科、総合歯科診療部、看護部、薬剤部、緩和ケアセンター、患者支援センターなどが連携している。対象となる疾患は、帯状疱疹、帯状疱疹後神経痛、三叉神経痛、各種頭痛、口腔顔面痛、舌痛症、線維筋痛症、CRPS（反射性交感神経性異常養症、カウザルギー）、神経損傷後疼痛、術後疼痛、脊椎に由来する痛み、各種神経痛、がん性疼痛などである。



C. 研究結果

口腔顔面痛に関する e-learning 教育システムにおける「学習部門」は、日本口腔顔面痛学会で作成した「口腔顔面痛の診断と治療ガイドブック第2版」のオンライン化と、各章に学習目標に沿った小テストを設定した。「仮想患者部門」では、動画で配信される患者の主訴や現病歴に対して鑑別疾患を挙げ、適切な診査や検査を選択し、その結果から診断・治療を行っていくという臨床プロセスを再現した。また、随時受講可能な実力テストを設け、結果はレーダーチャートで表示し、自身の学習推移や必要学習領域を把握できるようにした。口腔顔面痛学会が積極的に進めているオンラインセミナーにおいても、教育システムが活用可能であるように設定し、動画閲覧、資料のダウンロード、小テスト、掲示板形式の質疑応答機能を設けた。今後、本システムの運用を本格化する予定である。

徳島大学病院痛みセンター設立後、各科の連携が進むとともに、痛みセンターの存在が認知されることにより、スムーズな患者紹介

が観察されるとともに、痛みのために困窮している患者を救済することができている。また、徳島大学病院では医科の痛みセンターとともに歯科専門の痛みセンターも設立したが、四国地区で唯一の歯科専門の痛みセンターであり、四国全県から多数の患者紹介が見られている。

D. 考察

口腔顔面痛に関する e-learning 教育システムは、これまで存在しなかったものであり、医師、歯科医師をはじめとする医療者の教育には有効であると考えられる。また、「仮想患者部門」では、動画で配信される患者の主訴や現病歴に対して鑑別疾患を挙げ、適切な診査や検査を選択し、その結果から診断・治療を行っていくという臨床プロセスを再現したため、日常の臨床に非常に近い徐歌であると考えられる。この教育システムを活用して、口腔顔面痛治療のハードルが下がることを期待している。この教育システムの効果については、運用とともに検証を行っていく予定である。

徳島大学病院痛みセンター設立により、各科の連携が進み、痛みのために困窮している患者を救済することが可能となったのは良いことである。また、四国地区で唯一の歯科専門の痛みセンターを設立することにより、四国地区で口腔顔面痛に困窮している患者を救うことが可能になると考えられる。

E. 結論

口腔顔面痛教育のためのアプリケーションは、従来の e-learning では難しかった実践的な学習を仮想患者部門で行えることが大きな特徴である。

徳島大学病院痛みセンター設立後、痛みのために困窮している患者を救済することが可能となった。また、徳島大学病院では医科の痛みセンターとともに歯科専門の痛みセンターも設立することにより、四国全県の多数の口腔顔面痛患者に対処できるようになった。

F. 健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし